国東地方方言の動詞の活用タイプ

栗林セツ子

はじめに

大分県国東地方には、方言が豊富に残されており特異性がある。

国東地方方言の動詞の活用形態について、現在の姿を正確に記述してみたいと考える。

1．調査地の概況

調査地国東半島は、大分県北東部に位置し、瀬戸内海、伊予灘、周防灘に向かって突き出した円状の半島で、かつては六郷満山と称される仏教文化が栄え、仏僧たちの修行の場でもあった地として知られている。現在でも多くの寺が点在し史跡や仏像、磨崖仏、石造文化財など貴重な仏教文化遺産が多数存在し、さまざまな風習や行事が継承されている。

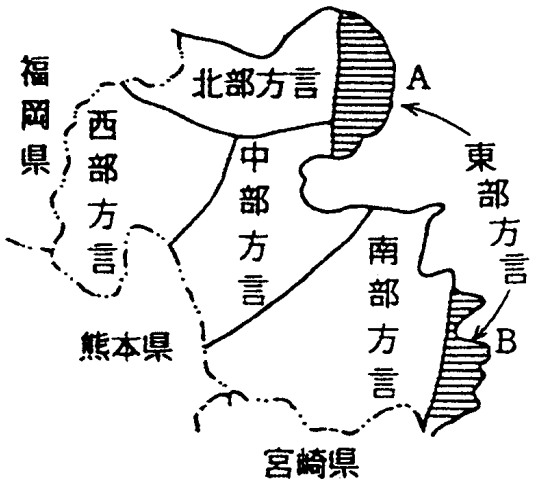
昭和30年代には13市町村が存在したが、現在は両子山を境に西部が豊後高田市、東部が姫島村、国東市、杵築市、日出町の5市町村に統合された。西国東地域は大分県北部方言域に、東国東地域は大分県東部方言域に属し、それぞれ異なった特徴を持っている。また、瀬戸内海は古くから海上交通が活発で、周防灘を隔てて山口県・広島県、伊予灘を隔てて愛媛県ともかかわりが深く、使用言語においても共通する点が多いように見受けられる。

2．方言区画

九州方言は、大きく、肥筑方言・豊日方言・薩隈方言に区分けされ、大分県方言は全体として豊日方言に属している。

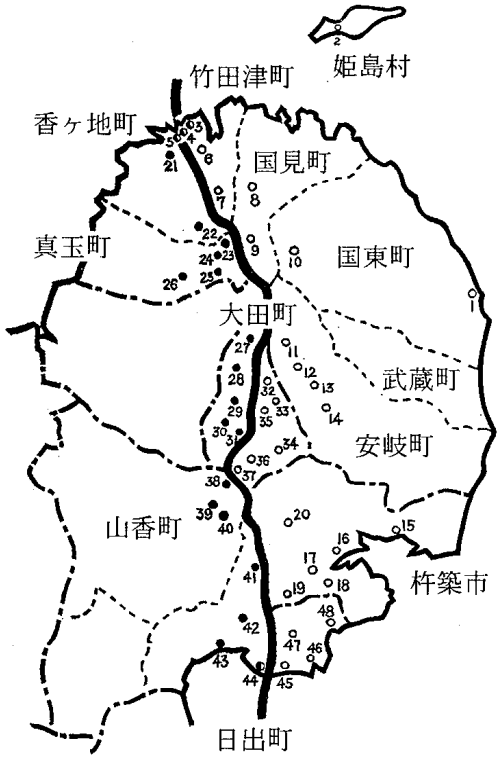
大分県内の方言は、音韻の特徴などから、『大分方言30年の変容』（1996松田）では、次の5つの区画に分けられており、本研究はこの区分に従った。

図１ 大分県方言区画図



『大分方言 30 年の変容』（1996 松田）より

図２　国東半島の方言境界線



市町村区分（市町村名は調査時のそれによる）

『大分県方言の旅』（1956 NHK 大分放送局）より

①　東部方言域：国東地方（図１Ａ地域）。すなわち国東半島の東半分の地域（国東市・杵築市の大部分注１・東国東郡姫島村・速見郡日出町の一 部注２）および津久見市と佐伯市の海岸部の一部（図１　Ｂ地域）

注１　旧大田村の一部（旧朝日村）は東部方言域に、その他の地域は北部方言域に入ると考える。

注２　日出町のうち、旧杵築藩に属する地域は東部方言域に、その他の地域は北部方言域に入ると考える。

②　西部方言域：日田市・玖珠郡西部

③　南部方言域：臼杵市・津久見市および佐伯市の東部方言域（Ｂ地域）を除く地域・豊後大野市・竹田市

④　北部方言域：中津市・宇佐市・豊後高田市・杵築市の一部

⑤　中部方言域：大分市など、上記４地域を除いた中央の地域

また、国東半島における東部方言的特徴を有する地域とそうでない地域との境界については、図２のように境界線を挟む地域で特に入念に調査がなされている（『大分県方言の旅』1956. ＮＨＫ大分放送局）ことから、この方言境界線に従うこととした。

今回の本稿における、国東地方とは、国東市、東国東郡姫島村、杵築市の大部分、速見郡日出町の一部の地域をいう。

3．調査方法の概要

調査については、主として会話の録音を文字化した資料や聞き取り調査、調査者の内省によるものを基に動詞の活用現象を記述した。

調査者（栗林）は、調査地の杵築市に生まれ、結婚後大分市に移り住んだが配偶者は国東市出身であり、家庭では方言を用いている。方言調査協力者はいずれも国東地方出身者である。

4．動詞の基本的活用タイプ

動詞の活用形について、共通語や方言に関する種々の先行研究を参考にして、その意味や形を定義し、それに沿って国東地方方言の動詞の基本的な活用タイプについて考察した。

動詞の活用タイプを歴史的に見ると、上代には四段・上一段・上二段・下二段・カ行変格・サ行変格・ナ行変格・ラ行変格の８種類の活用タイプが存在し、中古に下一段活用動詞が現れ９種類となったが、中世にはさらに大きく変化し、ラ行変格活用の四段動詞化、二段活用の一段動詞化が起こった。近世には四段活用の五段活用化、二段活用の一段活用化が進み、ナ行変格活用は五段活用に変わって活用タイプは５種類になって現在に至っている。

しかしながら、本方言の動詞の活用は、この変化が及ばず、二段活用動詞・ナ行変格活用動詞はそのままに残る一方で、上・下一段活用動詞はラ行五段化するという共通語とは大きく異なった体系となっている。

例文は、主として収集した会話の中から示し、漢字とひらがなで表記し、右側に共通語訳を付した。

4－1．動詞の活用タイプによる分類

文語動詞の活用は、二段活用の一段活用化が進んだが、国東方言の動詞は、二段活用は一段活用化しないままに残り、上・下一段活用動詞が五段活用化したため、一段タイプの動詞は今回の調査の限りでは見当たらず、五段活用タイプの動詞（以下第一変化動詞と呼ぶ）と、二段活用タイプの動詞（以下第二変化動詞と呼ぶ）およびこれらに当たらない特殊な活用をする特殊変化

タイプの動詞（以下特殊変化動詞と呼ぶ）に分けられる。

第一変化動詞には、「書く」「取る」などの五段活用動詞と、「見る」「着る」など文語の上一段活用動詞に相当するもののほか、琉球方言や九州方言の一部に見られ、落合直文『国書辞典』などに注記される文語の古い四段タイプの「伸ぶ」、文語の下二段動詞に相当し、共通語では下一段活用に相当する「寝る」「出る」がある。

第二変化動詞には、「起くる」「過ぐる」などの上二段活用動と「受くる」・「寄する」などの下二段活用動詞がある。

特殊変化動詞には、カ行変格活用の「来る」、サ行変格活用の「する」、ナ行変格活用の「死ぬる」・「往ぬる」、そして「書く」・「咲く」などの第一変化動詞と違って、音便語幹に促音便形式が現れる「行く」がある。

活用表は音韻表記により行い、長音はR、促音はQ、撥音はNで表記した。動詞の諸語形から語幹を取り出し、五段活用タイプの場合基本語幹にかかわる形としては、非過去、誘いかけ、命令、第一中止、条件をあげ、音便語幹にかかわる形として過去、第二中止をあげ計７つの形を示した。

それぞれの形は、「取る」を例にすると共通語では、“非過去”は「取る」、“誘いかけ”は「取ろう」、“命令”は「取れ」、“第一中止”は「取り」、“否定”は「取らない」、“条件”は「取れば」、“過去”は「取った」、“第二中止”は「取って」になる。

４－１－１．第一変化動詞

「書く」、「読む」などの五段活用動詞のほか、本方言では、上に述べた「伸ぶ」と、「見る」「着る」など文語動詞の上一段活用に相当するもので五段活用化の傾向を持つもの、共通語では下一段活用に相当するが五段活用化の傾向を持つ「寝る」「出る」がある。

基本語幹の形について語幹音の行別に所属する動詞をあげると、カ行動詞は語幹末の子音が－ｋの動詞で、書く・咲く・聞く・など、ガ行動詞は語幹末の子音が－ｇの動詞で、漕ぐ・研ぐ・嗅ぐ・脱ぐなどがある。サ行動詞は語幹末の子音が－ｓの動詞で、消す・話す・刺す・出すなど、タ行動詞は語

幹末の子音が－ｔもしくは－ｃの動詞で、待つ・勝つ・打つなどである。共通語ではナ行五段活用動詞の「死ぬ」は、本方言では非過去の形は「シヌル」・条件の形は「シヌリャ」と活用するため特殊活用動詞に分類した。バ行動詞は語幹末の子音が－ｂの動詞で、飛ぶ・並ぶ・選ぶなどである。共通語で上一段タイプの「伸びる」に当たる動詞は、本方言では上二段タイプの「伸ぶる」のほか五段タイプの「伸ぶ」が用いられ、「伸ぶ」はこのグループに加わる。マ行動詞は語幹末の子音が－ｍの動詞で、読む・編む・飲む・恨むなどである。ラ行動詞は、語幹末の子音が－ｒの動詞で、知る・取るなどのほか、文語の下一段タイプの「蹴る」も共通語と同じくここに入り、「有る」も誘いかけ・命令・否定の形はないが、活用は「取る」と同じでラ行五段活用と認められる。共通語と異なり「見る」・「着る」・「干る」などの文語の上一段活用動詞が五段活用化し、文語の下二段活用動詞のうち「寝る」「出る」も五段活用化してこのグループに入る。ア・ワ行動詞は語幹の末尾が－（ｗ）の動詞で歌う・思う・買う・慕うなどである。

４－１－１－１.五段活用動詞の活用

五段活用動詞の活用は表１のとおりである。基本語幹のほかに音便語幹を持ち、カ行・ガ行・サ行動詞はイ音便、タ行・ラ行動詞は促音便、バ行・マ行動詞は撥音便、ア・ワ行動詞はウ音便である。サ行五段タイプの動詞がイ音便語幹（ｗ）を持つグループに加わり、さらに母音連続に変化が生じていることや、ア・ワ行五段タイプにもウ音便語幹が表れるなどの点で共通語とかなり異なっている。

タ行は、語幹末の子音は音声的にはマタンの時は［t］であるがマツの時は［ts］、マチの時は［tʃ］で現れる。ア・ワ行動詞は語幹の末尾が－φか－ｗの動詞で歌う・思う・買う・慕うなどであるが、本方言では連母音の融合によりauがoRに変化するため、auを有する「歌う」「買う」などは、utauはutoR、kauはkoRのように変化している。「言う」は、命令の形に「ユエ」と「イエ」、否定の形に「ユワン」と「イワン」、条件の形に「ユワ」と「イヤ」のように二つの形が認められる。第二中止の形は「トッテ」「ミテ」「シ

テ」のようにーteの形もあるがーciの「トッチ」「ミチ」「シチ」のほうが一般的である。

表1　五段活用動詞の活用

例	書く	漕ぐ	刺す	待つ
基本語幹	**kak－**	**kog－**	**sas－**	**mat－**
非過去	kak－u	kog－u	sas－u	mat－u
誘いかけ	kak－oR	kog－oR	sus－oR	mat－oR
命　令	kak－e	kog－e	sas－e	mat－e
第一中止	kak－i	kog－i	sas－i	mac－i
否　定	kak－a－N	kog－a－N	sus－a－N	mat－a－N
条　件	kak－ya　－a	kog－ya　－a	sas－ya　－a	mac－ya　mat－a
音便語幹	**kai－**	**koi－**	**sai－**	**maQ－**
過　去	keR－ta	koi－da	seR－ta	maQ－ta
第二中止	keR－ci	koi－zi	seR－ci	maQ－ci

例	取る	飛ぶ	読む	吸う
基本語幹	**tor－**	**tob－**	**yom－**	**su－**
非過去	tor－u	tob－u	yom－u	su－u
誘いかけ	tor－oR	tob－oR	yom－oR	su－oR
命　令	tor－e	tob－e	yom－e	su－e
第一中止	tor－i	tob－i	yom－i	su－i
否　定	tor－a－N	tob－a－N	yom－a－N	suw－a－N
条　件	tor－ya　－a	tob－ya　－a	yom－ya　－a	su－ya suw－a
音便語幹	**toQ－**	**toN－**	**yoN－**	**suR－**
過　去	toQ－ta	toN－da	yoN－da	suR－ta
第二中止	toQ－ci	toN－zi	yoN－zi	suR－ci

例1）　みんなじ校歌を歌おうえ。・・・・・・・・みんなで校歌を歌おうよ。

例2）　何も言わんじ 帰れ。・・・・・・・・・・・何も言わずに帰りなさい。

例3）　いわれが分からん。・・・・・・・・・・・理由が分からない。

例4）　ようけ飲んじ奥さんにゃ隠しちょる。・・沢山飲んで奥さんには隠している。

条件の形は、共通語では「～すれば」で表されるが、本方言では、「書く」・「読む」を例にすると、「書く」は「カキャ」・「カカ」、「読む」は「ヨミャ」・「ヨマ」の二つの形があり、「カカ」、「ヨマ」のほうが多く用いられるようである。「カキャ」のキャ、「ヨミャ」のミャなど口蓋化しており、これがさらに直音化することもある点では、この方言の動詞の活用に生じる口蓋化はそれほど義務的なものではない。この口蓋化・直音化の傾向はほかの活用にも認められる。この点を考慮して「カキャ」の語幹に現れる口蓋化した ky －で表す語幹を kak －の語幹と別に立てることはしなかった。

例５）　あんたが行きゃみんな行くじゃろう。・・・・あなたが行けばみんな行くでしょう。

例６）　一財産売らな行けんじゃった。・・・一財産売らなければ行けなかった。

また、音便変化に伴い、連母音が生じた場合は融合が認められ、例えば、カ行五段活用動詞の「刺す」は、共通語では過去の形は「刺した」であるが、本方言では「セータ」が使われる。sasita がイ音便変化により saita となり連母音 ai が融合して seRta に変化したものと考えられる。「話す」・「出す」の過去の形も同様に「ハネータ」「データ」になり、カ行五段活用動詞「書く」も kaita が 連母音の融合により「ケータ」(keRta) となる。しかしながら、これら連母音の融合は、老年層に限られ、若年層には「セータ」、「ケータ」の言い方はほとんど認められなくなっているようである。

例７）　銭ゃ出えちゃってもな。・・・・・・たとえお金を出してあげたとしても。

ア・ワ行動詞は、「吸う」を例にすると共通語の過去形は「吸った」であるが、本方言ではウ音便の「スータ」である。また、本方言では連母音の融合により au が oR に変化するため、さきにふれたように au を有する例えば「歌う」は、utau が「ウトー」のように変化する。「セータ」「ケータ」とは違い、これらは若年層にも盛んに使われているようである。

例８）　もろうたから食べちょくれ。・・・・・・・頂いたから食べてください。

例９）　こうちかいちみろか。・・・・・・・・・・・買って帰ることにしようか。

五段活用タイプで特殊な活用をする動詞について調べてみると次のとおりであった。

表２　五段活用動詞の中で特殊な活用を持つ動詞の活用

例	有る	言う
基本語幹	**ar－**	**yu－**
非過去	ar－u	yu－u
誘いかけ	－	yu－oR
命　令	－	yu－e　　i－e
第一中止	ar－i	yu－i
否　定	－	yuw－a－N　iw－aN
条　件	ar－ya　－a	yuw－a　　i－ya　iw－a
音便語幹	**aQ－**	**yuR－**
過　去	aQ－ta	yuR－ta
第二中止	aQ－ci	yuR－ci

例 10）昔ん地図がありゃ分かるんじゃが。・・・・昔の地図があれば分かるのだが。

例 11）ボールは蹴らんので。・・・・・・・・・・・ボールは蹴らないのよ。

例 12）そげんこつ言わ誰でん怒るわ。・・・・・・そんなことを言えば誰でも怒るわよ。

「有る」は、誘いかけ・命令・否定の形はないが、活用形式は「取る」と同じでラ行五段活用と認められる。文語動詞「蹴る」は、下一段活用であったが、他のラ行五段活用動詞と同じ活用をしており、本方言でも五段活用化が認められる。「言（ゆ）う」は、基本語幹に yu －と　i －の二つの語幹が共存し、否定や条件の形には文語時代のハ行転呼音の－ w(a) が残存している。

４－１－１－２．文語の上一段活用動詞で五段活用化の傾向を持つもの

共通語では二段活用動詞の一段活用化が進んだが、本方言では文語の上一段活用形である、見る・着る・煮る・射る・干るなどは五段活用化し、過去や第二中止の語幹は五段タイプである。

表３　上一段活用で五段活用化の傾向を持つ動詞の活用

例	着る		煮る		見る	
基本語幹	**kir－**	**ki－**	**nir－**	**ni－**	**mir－**	**mi－**
非過去	kir－u	(ki－ru)	nir－u	(ni－ru)	mir－u	(mi－ru)
誘いかけ	kir－oR	ki－yoR	nir－oR	ni－yoR	mir－oR	mi－yoR
命　令	kir－e　－o	ki－ yo	nir－e　－o	ni－ yo	mir－e　－o	mi－ yo
第一中止	kir－i	ki－	nir－i	ni－	mir－i	mi－
否　定	kir－a－N		nir－a－N		mir－a－N	
条　件	kir－ya　－a		nir－ya　－a		mir－ya　－a	
一段系語幹		**ki－**		**ni－**		**mi－**
過　去		ki－ta		ni－ta		mi－ta
第二中止		ki－ci		ni－ci		mi－ci

例 13) 卒業式にゃ着物を<u>着ろう</u>え。・・・・・・・・・卒業式には着物を着ようよ。

例 14) 椎茸はよう<u>煮らん</u>とわりんで。・・・・・・椎茸はよく煮ないと悪いのよ。

例 15) 魚を<u>煮た</u>汁じ野菜を<u>煮ろう</u>え。・・・・・・魚を煮た汁で野菜を煮ようよ。

例 16) こっから<u>見りゃ</u>よう見ゆっで。・・・・・・ここから見ればよく見えるよ。

例 17) 結果を<u>見ち</u>考ゆりゃいいわ。・・・・・・・・・結果を見て考えればいいよ。

誘いかけや第一中止の形に一段活用の形が混在し、例えば［着る］の命令の形にはラ行五段化した「キレ」のほかに一段タイプで東日本系の「キロ」の形が「キヨ」の形とともに見られる。東日本タイプの命令の形 kiro は、本来の東日本式の一段活用タイプの命令形だったから ki － ro と分割されるはずであるが、本方言の「着る」に表れる－ｒ－は、これ以外は五段タイプ化した語幹に取り込まれるので、命令の形 kiro も本来とは異なるが五段タイプ化した kir － o となっているものとみなした。また、条件の形には、他の活用と同じように口蓋化・直音化した「キリャ」「キラ」、「ミリャ」「ミラ」の二つの形がある。

４－１－１－３．文語の下二段活用動詞で五段活用化の傾向を持つもの

文語の下二段活用動詞は共通語では下一段活用になったが、本方言でさらに五段活用化の傾向を持つ動詞は、語幹が一音節の「寝る」・「出る」である。

表4　文語の下二段活用で五段活用化の傾向を持つ動詞の活用

例	寝る		出る	
基本語幹	ner－	ne－	der－	der－
非過去	ner－u	(ne－ru)	der－u	(de－ru)
誘いかけ	ner－oR	ne－yoR	der－oR	de－y oR
命　令	ner－e　－o	ne－yo	der－e　－o	de－yo
第一中止	ner－i	ne－	der－i	de－
否　定	ner－a－N		der－a－N	
条　件	ner－ya　－a		der－ya　－a	
一段系語幹		ne－		de－
過　去		ne－ta		de－ta
第二中止		ne－ci		de－ci

例 18) 今日はもう遅え(オセー)から寝よ。･･･今日は遅いからもう寝なさい。
例 19) うちじ一緒い寝ろうえ。・・・・・・・・・・私の家で一緒に寝ようよ
例 20) 明日の試合にゃ出らん。・・・・・・・・・・・・明日の試合には出ない。
例 21) 大学を出ち5年たった。・・・・・・・・・・・・・・大学を出て5年たった。

「寝る」「出る」は、誘いかけ、命令、第一中止の形に一段タイプの形が残り、命令の形にラ行五段化した「ネレ」のほかに一段タイプで東日本系の「ネロ」の形が「ネヨ」の形とともに使われる。

4－1－2．第二変化動詞

共通語では文語の二段活用動詞は一段活用化したが、本方言では一段化しないままに二段活用の語形を残している。
起くる・過ぐるなどの上二段活用動詞と受くる・調ぶるなどの下二段活用動詞がある。

4－1－2－1．上二段活用動詞

上二段活用動詞は、起くる・過ぐる・降るる・落つるなどである。

表5　上二段活用動詞の活用

例	起くる		過ぐる		降るる	
基本語幹	oki−	ok−	sugi−	sug−	ori−	or−
非過去	oki−ru	ok−uru −uQ　−uN	sugi−ru	sug−uru −uQ　−uN	ori−ru	or−uru −uQ　−uN
誘いかけ	oky−oR		sugy−oR		ory−oR	
命　令	oki−ro　−i		sugi−ro　−i		ori−ro　−i	
第一中止	oki−		sugi−		ori−	
否　定	oki−N		sugi−N		ori−N	
条　件	oki−rya	ok−urya −ura	sugi−rya	sug−urya −ura	ori−rya	or−urya −ur a
過　去	oki−ta		sugi−ta		ori−ta	
第二中止	oki−ci		sugi−ci		ori−ci	

例22）もう、起きょうえ。・・・・・・・・・・・・・もう、起きましょうよ。

例23）10時過ぎんと店は開かんで。・・・10時を過ぎないと店は開かないよ。

例24）車から降るっ時気よ付けよ。・・・車から降りる時は気を付けなさいよ。

例25）大分で降るっで。・・・・・・・・・・・・・大分駅で降りるよ。

例26）公園を過ぐっ辺りじ見かけたで。・・・公園を過ぎる辺りで見かけたよ。

基本語幹は、oki −・sugi −など語幹尾が母音の「i」であるが、非過去の形には「オクッ」「スグッ」の形が出るなど非過去・条件の形はok −・sug −の語幹尾が子音の形を持ち、語幹が母音おわりに統一されない二段タイプの存在が見て取れる。非過去の形は「起きる」と「起くる」の二つの形が現れ、調査者には「オクル」のほうがよりなじみやすいが、若年層においては旧二段系の形が少なくなりつつある。また、他の活用と同じように条件の形に、口蓋化・直音化した「オクリャ」「オクラ」の二つの形がある。

なお、本方言では例24のように、動詞末音節のruの促音化は無声子音に続く場合のほか例25のように有声子音に先立つことも、例26のように母音に続く場合も見られる。

誘いかけの形のokyoRの語幹尾の子音も実際には口蓋化が生じていて、しかもこの場合はokoRという直音形はないのでokyという口蓋化した語

幹がたつはずであるが、この語幹の負うべき負担量が微量なので ok －とは別の語幹としないでおく。

4－1－2－2．下二段活用動詞

下二段活用動詞は、受くる・寄する・調ぶる・植ゆる・教ゆるなどである。

表6　下二段活用動詞の活用

例	受くる		寄する		調ぶる	
基本語幹	uke－	uk－	yose－	yos－	sirabe－	sirab－
非過去	uke－ru	uk－uru －uQ －uN	yose－ru	yos－uru －uQ －uN	sirabe－ru	sirab－uru －uQ －uN
誘いかけ	uky－oR		yosy－oR		siraby－oR	
命令	uke－ro	uk－ii	yose－ro	yos－ii	sirabe－ro	sirab－ii
第一中止	uke－		yose－		sirabe－	
否定	uke－N		yose－N		sirabe－N	
条件	uke－rya	uk-urya －ur a	yose－rya	yos－urya －ur a	sirabe－rya	sirab－urya －ur a
過去	uke－ta		yose－ta		sirabe－ta	
第二中止	uke－ci		yose－ci		sirabe－ci	

例	教ゆる					
基本語幹	osi-	osiy－	osu-	osuy－	oso-	osoy－
非過去	osi－eru	osiy－uru －uQ －uN	osu-eru	osuy-uru －uQ －uN	oso－eru	osoy－uru －uQ －uN
誘いかけ	osi－eyoR	osiy－oR	osu－ey oR	*osuy－oR	oso－ey oR	osoy－oR
命令	osi－ero －eyo －ii		osu－eyo *－ii －ero		oso－eyo －ii *－ero	
第一中止	osi－e		*osu－e		oso－e	
否定	osi－eN		*osu－eN		oso－eN	
条件	osi－erya	osiy－urya －ura	osu－erya	osuy－urya －ura	oso－erya	osoy－urya －ura
過去	osi－eta		osu－eta		oso －eta	
第二中止	osi－eci		osu－eci		oso－eci	

＊のしるしは、今回はっきり認めることができなかった言い方である。

例 27）明日、面接を受くる。・・・・・・・・・・明日、面接を受ける。

例 28) 車を端に寄しい。・・・・・・・・・・・・車を端に寄せなさい。

例 29) そりゃ、忘るるわえ。・・・・・・・・・・それは、忘れるわね。

例 30) 覚ゆっごとなっちょる。・・・・・・・・・覚えるようになっている。

例 31) もっとよう調べち書き直せ。・・・・もっとよく調べて書き直しなさい。

基本語幹は、uke－・yose－など語幹尾が母音の「e」であるが、非過去の形にはウクル・ヨスル、条件の形にはウクリャ・ヨスリャの形があり二段タイプの存在が見てとれる。非過去形は「受ける」と「受くる」の二つの形が現れるが、調査者には「ウクル」のほうがよりなじみやすい。若年層においてはこの形は少なくなりつつあるものの、上二段活用に比べると語彙も多く、使用頻度も高いようである。また、非過去の形に促音や撥音の形を有し、他の活用と同じように条件の形に、口蓋化・直音化した「ウクリャ」「ウクラ」の二つの形がある。命令の形 ukii は、二段タイプの命令のウケヨから変化したものであるが、音声的にはすでに uke－が取り出せなくなっているため、uk－ii と分析して語幹 uk－の系列に含めた。

「教ゆる」は、基本語幹に osie－・osiy－、osue－・osuy－、osoe－・osoy－の六つの語幹が存在し、非過去の形は、「オシエル」・「オシユル」・「オスエル」・「オスユル」・「オソエル」「オソユル」となる。最も一般的なのは「オシエル」で、「オソユル」は老年層でも少なくなっているようである。

非過去・条件の形に二段タイプの存在が見て取れ、条件の形には、口蓋化・直音化した「オシユリャ」・「オシユラ」などの形がある。「おそわる」に当たる形は、osowaru であって、他の「教える」形に対応するものは見られない。

例 32) 音楽は校長先生がおそゆる。・・・・・・・・音楽は校長先生が教える。

例 33) 作り方をみんなにおしようえ。・・・・・・作り方をみんなに教えようよ。

例 34) わきょーおそゆりゃ納得でくんが。・・・理由を言ってくれれば納得できるのだが。

例 35) 英語をおしえち国い帰った。・・・・・・・・英語を教えて国に帰った。

4－1－3．特殊変化動詞

特殊変化動詞には、カ行変格活用の「来る」、サ行変格活用の「する」、ナ

行変格活用の「死ぬる」・「往ぬる」、カ行促音便タイプの「行く」がある。

「行く」は、他のカ行五段活用動詞がイ音便化するのに対し過去形が「行った」と促音便化するため、特殊変化動詞に分類した。

なお、複合サ変動詞「加勢する」に由来する「カッスル」は、第二変化動詞タイプに、また「愛す」は共通語同様、サ変タイプから五段活用タイプ（第一変化動詞）化してきている。

表7　特殊変化動詞の活用

例	来　る	す　る	死ぬる		行　く
基本語幹	k－	s－	sin－		ik－
非過去	k－u－ru	s－u－ru		sinu－ru sinu－Q	ik－u
誘いかけ	k－oR	s－yoR	sin－oR		ik－oR
命　　令	k－o－i k－eR	s－e	sin－e		ik－e
第一中止	k－i	s－i	sin－i		ik－i
否　　定	k－o－N	s－e－N	sin－ a－N		ik－a－N
条　　件	k－u－rya k－u－ra	s－u－rya s－u－ra	sin－ya sin－a	sinu－rya sinu－ra	ik－ya ik－a
音便語幹	ki－	si－	siN－		iQ－
過　　去	ki－ta	si－ta	siN－da		iQ－ta
第二中止	ki－ci	si－ci	siN－zi		iQ－ci

例36）応援い「けえ」ちゃすぐ来る。・・・・・・応援に「来い」と言えばすぐに来る。

例37）済んだら こっちい来え。・・・・・・・・・・済んだら こっちに来い。

例38）年寄りじゃねえとせんろ。・・・・・・・・年寄りでなければしないでしょ。

例39）しっかり勉強しち将来は学者になる。・・・しっかり勉強して将来は学者になる。

例40）往ぬっ時は一緒に往のうや。・・・・・・・帰る時は一緒に帰ろうよ。

例41）飲みすぐっとはよ死ぬるど。・・・・・・・飲みすぎると早く死ぬぞ。

「来る」の命令の形は「コイ」と連母音の融合による「ケー」、「する」の命令の形は「セ」であるが、若年層においては「ケー」「セ」は少なくなり、「キヨ」「シヨ」が使われる。「死ぬる」は、若年層においては「死ぬ」が一般

的であり、「往ぬる」は、動詞項目自体若年層には全く現れないようである。

最後に、まとめとして国東方言の動詞の活用タイプ別分類(表８)をあげる。

表８　動詞の活用タイプ別分類

第一変化動詞	五段活用タイプ	カ　行	書く・あらく(間があく)・くんずく(かがむ)・ほめく(ほてる)
		ガ　行	漕ぐ・研ぐ・泳ぐ・嗅ぐ・脱ぐ
		サ　行	消す・話す・うむす(蒸す)・いらばかす(騙す)
		タ　行	待つ・勝つ・打つ・持つ・よだつ(思いたつ)
		バ　行	飛ぶ・並ぶ・選ぶ・忍ぶ
		マ　行	読む・恨む・つるむ・いっこむ(どっと入れる)
		ラ　行	取る・知る・蹴る・まくる(労働を交換する)・いみる(増す) かやる(倒れる)・ぬまる(泥に埋まる)・たまがる(驚く)・せる(押す)
		ア行・ワ行	歌う(ウトー)・せらう(そねむ)・よこう(休む)・かるう(背負う)
		五段活用傾向	見る・着る・煮る　(文語では上一段) 寝る・出る　(文語では下二段)
第二変化動詞	上二段活用タイプ	カ行	起くる・生くる・でくる（出来る）
		ガ行	過ぐる
		ザ行	閉ずる
		タ行	落つる
		バ行	伸ぶる・錆ぶる
		ラ	降るる
	下二段活用タイプ	カ行	受くる・長(た)くる・老(ふ)くる・分くる
		ガ行	告ぐる・曲ぐる・下ぐる・投ぐる
		サ行	寄する・痩する・任する・かっする(加勢する)
		ザ行	混ずる・撫ずる
		タ行	捨つる・育つる・おだつる(調子にのせる)・かつる(加える・入れる)
		バ行	調ぶる・述ぶる・比ぶる・食ぶる
		マ行	閉むる・決むる・収むる・舐むる
		ヤ行	越ゆる・教ゆる・冴ゆる・つゆる(潰れる)
		ラ行	晴るる・ぐるる(ぐれる)・かいわるる(孵化する)
特殊変化動詞	カ行変格活用		来る
	サ行変格活用		する・忘ずる
	ナ行変格活用		死ぬる・往ぬる
	カ行促音便タイプ		行く

おわりに

これまで方言への関心は皆無に等しく、言語研究の過程において方言の重要性を認識し、初めてアクセントの共通語との違いや動詞の古い活用形式など大分県の方言の特異性に気づいた。

大分県国東地方は、かつては陸の孤島といわれたが、近年は交通網の整備や教育の充実などで地域差はなくなりつつあるようにみえる。しかしながら、一大霊場として六郷満山と称される仏教文化を育んだ環境は、この地方独自の文化を継承し言語においても独自性を有していると思われる。若年者の都会への流出などで地方文化が消滅しつつある今、方言についても同様の傾向にあると考え、現在の国東地方の方言を調査研究し、残された姿を正確に記述したいと考えた。

今回は、本方言動詞の活用タイプを記述するなかで、特徴的な活用形について最小限の文例を示したが、この過程で本方言が言語学的にも貴重な存在であることを改めて確認することが出来た。本方言の動詞の文法的な意味、用法などの扱いを中心とした活用体系をめぐる問題については別項を用意したいと考えている。

さらに、会話における格助詞の省略や連母音の融合などによる会話の簡略化、文末の省略も強く印象に残っている。これを機会に、国東地方の方言について関心を持ち、今後も研究を続けていきたいと考える。

最後に、研究についてご指導いただいた松本先生、松田先生、森脇先生をはじめ、方言調査にご協力をいただいた方々に深く感謝し、厚く御礼申し上げたい。

＜参考文献＞

『大分県方言の旅』ＮＨＫ大分放送局　1956

『国東半島の昔話』宮崎一枝編　1969　三弥井書店

『講座方言学９九州地方の方言』飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編 1983 国書刊行会

『大分県史 方言篇』大分県総務部総務課 1991 東洋出版

『大分方言 30 年の変容』松田正義・日高貢一郎 1996 明治書院
『地方中核都市方言の行方』陣内正敬 1996 おうふう
『日本列島方言叢書 26 九州方言考④』井上史雄ほか著 1999 ゆまに書房
『ガイドブック方言研究』小林隆・篠崎晃一編 2003 ひつじ書房
『日本語の文法』高橋太郎ほか著 2005 ひつじ書房